

成果報告書

記入日 2014年 8月 31日

氏名 和田 佳浦	渡航先国名 メキシコ	所属機関 社会人類学高等調査研究所(南東支部)
研究テーマ：マヤ系先住民族トホラバル村落の権威の変容—若者、ジェンダー、ネットワーク—		
研究期間：2011年11月～2014年5月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>現在見られる村の統治機関や政治組織の変化（による摩擦）は、古くからの権威のあり方とより広域な社会における政治動態の影響が強い。しかしその歪みの中で、国内外への出稼ぎ、宗教活動の活発化、教育の振興などを通じて、若者世代がより多様な経験をもち、少しずつ村での変化を生み出している。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>メキシコ・チアパス州の農村地域にあるトホラバル民族の村では、村の統治機構である農地委員会や家族の長としての父親が多くの権威をもち、人々の行動規範や個人の活動を支配してきた。申請者は、トホラバル民族の若者たちが現代の新しい環境—より遠方への移民、プロテスタントの隆盛、教育の普及—の中で、社会的ネットワークの広がりが生じ、これを通じて伝統的な村の権威に影響を与え、変化を引き起こしている、という仮定に基づいて現地調査を開始した。村で最初の短期調査を終えた後、本調査開始前には「宗教」「移民」「教育」の3つの側面から伝統的社会の変化の兆しを感じていたからである。しかし、2年超に及ぶ現地調査によって、想定とはことなる状況が見えてきた。</p> <p>まず移民についての調査結果は次の通りである。調査村のサルティージョでは、かつて米国への国際移民を頻繁に送りだしていた時期もあったが、現在はメキシコ・シティを中心としたものである。米国移民経験者らへの調査では、彼らの生活が米国の主流社会から隔離されたところで形成され、心身ともに良好を維持しにくい環境に置かれ、村社会の延長線上にあるような非常に限定された社会的関係を保持しているということが明らかになった。また継続的で大規模な移民の送出不起こらなかったため、米国において民族もしくは地域的集団としての（意識的な）コミュニティが形成されることはなかった。現在、より一般的なメキシコ・シティへの出稼ぎは、短期的で、場合によっては反復的であるが、出稼ぎ先での生活環境は劣悪で、コミュニティ形成やネットワークとしての広がりも国際移民と同様に限定的であった。もちろん、親族や友人・知人の紐帯は強く、出稼ぎする人間にとって必須の社会資本である。しかし結局のところ、現在の出稼ぎは、彼らの祖父や親の世代が慣行としていた州内の農場等への出稼ぎの時代からあまり変わっていない。つまり、社会の下層に位置する使い捨ての単純労働に従事し、若年男性にとっては成人への通過儀礼のような意味があり、同時に村での経済的欠陥（現代はよりその「欠陥」が大きい）を補うものであり、村や地域に戻った際に活用できる知識や経験、ネットワークが得られることは稀である。ただし、後述するように新たな宗教を村で推進する役目を負ったり、移民</p>		

(経験者)がこれまでの権威から離れたところで組織化するということは起こっている。以前と異なり、数カ月だけでなく数年単位で村を不在にすることがあるため、村社会との心理的な乖離が生じ、村社会の原則であった全員の(少なくとも形式としての)“結束”を崩す要素をもって村へ帰る人間が増えてきたと言える。家庭内では、通過儀礼を終え、家族に経済的に大きな貢献をすることで、家庭内での力関係は微妙に変わるものの、これは過去の移民と大きな差がないと思われる。ただし、少数だが、頻繁に出稼ぎする夫に代わり(または村を出たまま戻らない夫に代わり)家族を支える女性たちが、世帯主としての決断や手続きをするようになり、彼女たちによって、これまで男性主導で行われていた事柄に変則的だとしても女性が参加できるように村や家庭内で促している。

次に、村の宗教についての概観である。サルティージョでは、古くは皆が名目上のカトリック信仰者であったが、90年以前からプロテスタント改宗者が出現、90年代に入り増加したため、村周縁の荒野に数度にわたり改宗者集団が追放され、同地に新たな村(チャカラ)が作られたという歴史をもっている。2000年以降追放はなくなったものの、数年前までプロテスタント改宗者に対する弾圧が存続していたが、現在では、サルティージョ村でカトリックとプロテスタントは若干の緊張を伴いながらも共生している。絶対的な条件ではないが、改宗者には、①農地の法的権利を持たない若年層、②出稼ぎ先などでプロテスタントらと密に接した経験があるもの—に当てはまる場合がよく見られる。移民先でプロテスタント宗教に出会い、援助を受けたり、活動に参加したりしていた若い改宗者は、村で新たな改宗の波を作っている。村の「伝統」「信仰」を否定して新しい考え方を取り入れているようにも見えるプロテスタントだが、その一方で、(特に女性の)進学に積極的でない、聖書の世界観に傾倒するなど、過去への回帰とも言えるような面ももつ。従って、このカトリックからプロテスタントへの改宗の流れは、全く新しい考え方や生き方への変化というよりは継続の側面も多々あるのだが、権威への影響という点では、村を決定的に分断した意味が大きい。宗教行事への協賛金の支払い拒否、祭りへの不参加など、村の決め事を破り、村の主流権力から敵視されるなど、村の規範を遵守しない「例外的な集団」の存在が初めて既成事実となったことは、その後の村の変化に通じるとと思われる。

他方、改宗者の家族レベルの状況は、両極端だ、という印象がある。上述したような大多数の典型的な貧しい農民の改宗者層と高学歴者からなる改宗者層がいるからである。前者の例でいうと、カトリックに比してプロテスタントの場合、宗教的枠組みの中で何らかの役割をもつことがある若い男性・女性は、その宗教的意味においては、強い意志を持ち行動することが多い。しかし、長期的スパンで観察した場合、彼・彼女らは保守的で閉ざされた空間における最大限の自主性を享受しているに過ぎず、その枠から出ることの難しさを目の当たりにした。例えば、改宗した家族の中の女性像は、妻・母であり、進学等の選択肢がない。後者である高学歴者・バイリンガル教師等の改宗者の場合、個人的にはすでに多くの自由を有する人々の間での選択肢としての改宗である。個人が宗教をツールとして得られるもの、得たいものは、その社会階層によっても違いがあり、権威への影響についても分けて考える必要がある。

本調査において、村の変化への寄与者となる可能性を最も感じたのは、高等教育を受けた集団であった。彼らは、農民である村の大多数の住民(同年輩の若者)とは異なる発想や将来への計画を持つにもかかわらず、必ずしも村の外だけに目を向けているのではなく、村や家族との強いきずなを感じている場合が多い。特に、女性たちの発言から、村や家族への愛情、義務感、恩などを強く有すると同時に、村外の世界での可能性や希望に大きく胸を膨らませている様子がうかがえた。これは、個人的な目標や

人生計画など考えられない村の女性たちとは対照的である。家庭内で彼・彼女らが特別な位置にいるのは、彼・彼女ら自身の努力だけではなく、進学や就職の選択肢が広がり、それらの経済・社会的効果が広く認知されたことや、特に親子関係の変化については、彼らが一般的な農民家族の役割構造（世帯主が世帯構成員すべての仕事や生活の管理責任者となる）から逸脱していることが、大きな要因にあると感じた。一方、彼らが集団として、村の権威にどのように影響を与えているかについては、移民や宗教グループのように明確には感じられない。既述の2グループは、直接的に村の権威へ関わろうとせず、むしろその中心から離れるという間接的な方法で、村の権威への影響を与えている。他方、高等教育を受けた人々の場合、村の伝統や村の行動規範へは理解や関心を示し、ごくわずかだが政治組織で重要なポストに就いているものもいる。しかし政治への積極的な参加が高学歴者の傾向というわけではなく、むしろ同グループの若い人々の間では、政治的な活動には関わりたくないが、プロジェクトや開発を通じて経済的な貢献を村にしたいと考えている人たちが少なからずいる。

全体を振り返ると、親が子の生き方を決めるという旧来の関係は、一定の環境におかれた場合、時間を要しながらもほぼ確実に変化していくと感じられた。一方で、村の「権威」については、移民や宗教、教育などの状況が進行することに関係して何らかの変化が起こると想定していたものの、実際は、地域的な政治組織の乱立によって、村内の政治状況が次々と変化してゆき、想定したような相関関係を把握するには至らなかった。村での滞在中にたびたび遭遇した政治的対立は、直接的には、本来ひとつの政治組織に属していた村人が、その後上位組織の分裂などによって、村内が各グループに分かれたことに起因する。かつて組織への参加は「土地の取得」が目的であったが、94年までに可能な土地をすべて手に入れ、現在その目的は「農業や家の整備などに必要な資材やプロジェクト等のわずかな分配金を得ること」が目的となっている。またそのような資源を得るためのチャンネルが以前より増え、それを運用する能力を持つ人々も増えたため、大きな組織である必要がなくなったともいえる。同時に、以前から存在する権威のあり方として、個人的な問題が組織上の問題として取り扱われたり、またその逆に組織上の問題が村人の問題として取り扱われたりすることで、結果として、村内のグループ間の対立に発展するようになった。特にここ数年で、村内外での政治的対立が増加しており、本調査終了間際にも、誘拐や銃撃戦を含む暴力的な事件が村で起こっている。そしてこのような状況の中で、村を統率し代表するはずの農地委員会が機能しないという事態にまで陥った。村の「権威」は明らかに変化のときを迎えているが、その急激な変化には、以前から存在する村特有の性質がみられ、それとともに社会政策、地域の政治状況等が複雑に絡み合っている。そこで生じた歪みや隙に、若い世代を含め、これまで権力をもつことができなかった層が入り込んでいるというのが、現在私が理解している変化のプロセスである。

本調査開始時には、若者の「ネットワークの広がり」という個人の活動領域の拡大が既存の権威の変化において、大きな意味を持っていると考えていたが、若者が中心となって権威の変化を促しているというストーリーを描くことは現状からは難しい。まずは、これまで収集してきた情報を基に、基本となっている村の権威、権力機関について掘り下げて考え、村人が権威に求める機能や影響を及ぼす領域などについて明確にする必要がある。そして、変化を続ける地域の政治経済状況を注視しながら、若者や女性たちが、それぞれ村の中で小さな変化を起こしていること、両者の関係について引き続き考えていきたい。最後であるが、本調査の実施を支えてくれた貴財団に心から感謝の意を表したい。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学延長（私費）期間を含め、計2年半をメキシコのチアパス州で生活してきた。村生活への順応は非常に難しく、最初の一年半ほどは、国境の街コミタンに生活のベースを置きながら、隣の市に属するサルティージョ村を数日から1週間単位で訪問滞在するというスタイルをとった。サルティージョ村があるラス・マルガリータ市とコミタン市は、隣接しているだけでなく、社会経済的なつながりが強く、もともとコミタンから派生する形でラス・マルガリータ市が形成され、ともに発展してきた。コミタンは行政・経済上も上位に位置し、植民地時代の面影や慣習が強く残り、先住民と非先住民の関係を見る上でも、非常に面白い土地であった。留学の最後の1年弱では、村滞在の転機を迎えた。自分としてもなぜこのような変化が起こったのかわからないが、村で3度にわたり1カ月を超える滞在をするようになった。以前の村滞在は、まさに“努力”や“我慢”の結果得られたものだったが、この頃になってようやく、村にいたことが自然だと思えるようになり、突然視界が開けた、そんな感覚があった。それまでは、訪問者であるという私自身の感覚もあったが、より長期の滞在をするようになり、村人からの認識も変わっていったのを感じた。多くの人たちから、私が村の一部のような存在だと感じているといった感想を聞くことができた。それ自体が、研究にとってプラスに働くのかマイナスに働くのかを決めるものではないが、このような信頼を与えてもらったことで、自分の村への入り方にもより自信をもてるようになった。

そしてもうひとつ、留学生生活を終えた自身の変化にもつながる経験があったことを記したい。私の調査の形の多くは、オープンインタビューであり、若者たちとのラフな会話とともに、老人や大人たちとの対話も頻繁に行っていた。彼らの話しをじっと聞く、評価をするのではなく彼らひとりずつの言動そのものを受け入れる（客観的な「観察」という気持ちはまた別に存在するものの）、どのような人に対しても敬意を忘れず、丁寧な対応をすることを常に心がけ、村での調査を行ってきた。そして村の人たちの生活や仕事を、村での滞在中だけでも共有するように心がけた。そのようにして2年半を過ごしてきたことで、研究者として得るものがあるだけでなく、人間として大きな成長があったと感じている。

今後の社会貢献

調査地のサルティージョ村は、いまだメキシコの最貧困地域と言われるチアパス州先住民地域の一事例として非常に価値があると思う。左翼ゲリラ・サパティスタ民族解放軍と関わりがあった村、宗教・政治対立の激化する村、一定の自給生活が守られた村、教育の普及が進む村—などの様々な面で、興味深い経験をしている。私が同村の調査研究を続けていくことで、まだ部分的にしか明らかにされていないチアパス農村の現状への理解に役立てるとともに、農村としての持続的発展、村人や若者が主役となった内的発展について、ひとつの新しい視点を提供できると考える。

また研究としての社会貢献だけでなく、調査村や調査の対象となっている人々への還元もできなければならないと思う。外部の人間が入ることで村への様々な影響（プラスもマイナスも）があると思うが、研究上、特に若者や女性との接触が多い。積極的に人生を生きている人もいれば、様々な問題を抱え悩んでいる人もいる。調査者の研究を示していくことで、それら個々人の状況が客観的に理解され、状況の改善に少しでも結びつくことができれば幸いである。また、人々からは村や地域のことを、調査者自身からは日本や世界のことを話し交流することで、双方向的な経験や知識の交換をしていきたい。

写真 1



写真 2



写真 3

